

E-26 兵庫県内における酪農家庭主婦の家庭経営の実態と問題点の検討

神戸女大家政 立石睦子 兵庫女短大 前田タケコ

兵庫県生改専攻 ○藤原君子 西村美代子

目的 酪農家庭の主婦の生活時間構造は、一般家庭の主婦と異なるパターンを持ち、これは酪農家庭の特色となっている。そこで、この生活時間を分析し、家事労働と生産活動、子女の教育など一連の生活の中から、問題点を探り、さらにそれら一つずつ解明しながら、新しい酪農主婦像をめぐりたいと考え、実態調査を行なった。

方法 兵庫県下の代表的酪農地帯、即ち北部(但馬地区)中部(神戸地区)南部(淡路地区)より、県農林部の協力ののもとに、大、中規模の酪農家庭を選び、家庭経営の実態を細部にわたって調査した。方法は、現地での実測も含め、聞きとり方式で行った。さらに地域毎に10～15人の主婦代表とグループインタビューを行い、共通の問題点を検討した。

結果 対象の農家は、乳牛30～36頭の規模で、基幹労働力は3人以上であった。機械化は普及しているが、共同作業形態をとっていないため、資金面に苦勞が少なくない。主婦の日常のパターンは、生産活動に約10時間(内酪農6時間)、家事労働に約2時間を費やしている。何れも家族間、親子の対話に欠け苦しんでいる。この重労働に耐えるための体力作りについては、一人一日の牛乳摂取量は、平均300cc、ccを超え、飲用のみならず、調理にも活用し、良質の動物性たん白質の摂取量も問題はなかったが、一部地域で緑黄野菜不足のところもあった。地域汚染は、都市部と異なり、調査の範囲では問題はないが、むしろ頭髮、衣類の臭気の除去が困難で、これが後継者問題とも関連して苦慮していることがわかった。作業衣の材質、着脱頻度、之に伴う更衣室、シャワー、洗濯室、台所の構造面に配慮の余地があった。なお経営面による地域差が認められた。